

J O F I 東京通信

第4号 平成28年1月15日発行

<http://www.jofi-tokyo.org/>

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌

目次

南極海の捕鯨の話	遠藤 実会長……	1
魔法の救命具	阿部 敏明………	2
2015年のフライ釣行記	新井 勝之………	2
釣りインストラクターになって	門脇 勇………	3
アラスカ釣行記	木村 陽輔………	4
黒部源流 薬師沢釣行	吉岡 宏治………	6
キッズテンカラ教室を開催して	吉田 孝………	8
水産多面的機能発揮対策事業	鈴木 伸一………	9
続 釣り場の魚たち	四条 徳明………	11
お宝コーナー………		12
2015年度活動実績………		14

南極海の捕鯨の話

遠藤 実会長

10月の勉強会で、「南極海の捕鯨の話」と題し、浅野一郎氏が水産庁在籍時に、長期にわたり南氷洋で体験された貴重な捕鯨の話を、プロジェクターを使いながら講演された。

これは浅野氏に了解を得て引用しています。捕鯨は有史以前から行われていたようだが、我々の記憶には、綱の付いた銚を大砲で打ち込むノルウェー式捕鯨がある。1934年(昭和9年)に日本が南氷洋に進出。私が生まれた年である。戦時中には補給艦

や駆潜艇などに転用も念頭に置かれ、大切にされていたそうだ。戦後、日本の深刻な食糧難を助けるため、GHQの指導によって南極海捕鯨が復活された。

日本では伝統的に、鯨は皮、肉、内臓、油に至るまで利用、ヒゲや歯なども工芸品として利用していた。鯨油のみの目的で捕鯨を行っていた西欧諸国は、安価な石油製品の生産に伴い、鯨油市場の消滅により採算が取れなくなり、南氷洋より撤退していった。

1987年、日本でも南極海での商業捕鯨を終わり、翌年より科学調査目的の調査捕鯨を開始。2014年国際司法裁判所で、日本の調査捕鯨が商業捕鯨とされ、調査中止を命じられた。

平成27年12月1日、2年ぶりに調査捕鯨を再開、来年3月までに333頭のミンククジラを捕獲のため出航した。又、シーシェパードの妨害や、西欧諸国から批判されるのではないかと。然し、韓国では年間2,000頭もの鯨を捕獲しているとの事、なんで日本だけが批判されるのか。

浅野氏の興味ある講義を受けた数日後、全釣り協の会議の席で、八木景子監督「ビハインド・ザ・コーヴ」というドキュメンタリー映画が、自民党本部で上映されると聞いて出かけて見た。8階の映画館は満席。2010年和歌山県太地町でのイルカ漁を題材にしたドキュメンタリー映画『ザ・コーヴ』がアカデミー賞を受賞したが「隠しカメラやカメラの技術で海の色を変えたり、事実と違う」という声が多くの人から上がり、カメラ技術無しで4ヶ月間自費での映画製作に挑戦した八木景子監督。カナダのモントリオールで開催された「第39回モントリオール映画祭」にワールドプレミアムとして正式出品され、多くの観客より「捕鯨に対する考えが変わった」「勇気ある作品だ」と国内外の観客及びメディアから非常に高い関心を集め、2016年1月30日より新宿にて公開されるとの事である。

JOFI東京設立時より事務局長(副会長)4年、会長5年という長きにわたり、皆様方に支えられてここまで来ましたが、若い人材も加入されたようですし、少しでも若返るべきと思ひ、JOFI東京がこれからより良い方向に向かう事を祈願して、『老兵は去ります』。長期間有難うございました。

魔法の救命具

阿部 敏明

46年間、夢中で離島専門に磯釣りを楽しんできたが、私は竿を置く気持ちはさらさらしない。理由は恐怖心（岩礁に飛び乗る、悪天候、体力の限界、獲物への挑戦）を感じないからである。

深夜にチャーター船で港を出港 → 早朝岩礁に到着 → 渡礁 → 大物釣り挑戦 → 鮫やウツボの襲来 → チャカに乗船 → 悪天候 → 無事港に到着 → 清算をして帰宅 一般的な夜行日帰りのハードな釣行であろう。

釣りは大変事故が多いレジャーといわれている。ちなみに海上保安庁が公表した「平成26年 釣り中の事故発生状況」を参照すると

事故者 273 名（マリンレジャーに伴う事故者総数 803 名） 内死亡・行方不明者 87 名

死者・行方不明者の事故種類ごとの割合（平成17年～26年） 海中転落 903名、溺水 70名、病気 42名、負傷 5名、帰還不能 3名、その他 7名

海中転落に伴う死者・行方不明者のライフジャケット着用状況（平成17年～26年） 着用 120名（着用率 13%） 非着用 783名（非着用率 87%）

ライフジャケット着用は命綱であることが良く分かる。

私が体験した数少ない磯釣りでの事故

①小笠原 母島で取材の為に同行した某新聞記者が船の乗り換えに失敗、海中へ転落、肩を脱臼、取材中止。島の診療所で応急処置。

②新島 鵜渡根カツオ群礁で天候の急変。うねりが高く、釣り人 3名撤収できず海上からの引き上げ、潮が大変早く 1,000m 以上流された。クレーンは回収できたが釣り具などはすべて流失。

③八丈小島 磯際で釣る友人が突然消えた。海水が溜まった池に 6～8m ヨタ波で飛ばされたがずぶ濡れで済み、岩場なら大怪我のところ事なきを得た。

④御蔵島元根群礁 初心者、岩場を移動中転倒。ヘルメットを着用していなかったので頭部裂傷。出血が少ないのでタオルで応急処置。

⑤御蔵島テブサ 魚をかけて得意げに動き過ぎ海中へ転落。磯際を流されたので危険な状況であったが救命具を振って船を呼び 3名乗船して海上から引き上げた。私の写真撮影しっかり見ていた。

⑥式根島鯛房群礁 渡礁の際、波の高低でタイミングが合わず着地失敗。転倒時右手をついて小指骨折。島の診療所へ急送。

⑦三宅島三本岳 海老根 信じられるか信じられないか本当に見ました。磯際で釣り座をとって石物を狙っていた某クラブの会長、たまにくる大波の返す波で海上へと！ と！ 次の押し寄せる大波で元の釣り座へ戻ってきた。『楽しんだ？』と問うと本人まったく記憶にないという。

長年石物釣りをしていて大きな海難事故がなかったのは、油断しない、安全優先、天候と海の変化を感知して勇気ある撤退ができてきたからこそではないだろうか。

魔法の救命具、それはペットボトルと考えている。

法定浮力とは標準体重の大人 1人が淡水中に 24 時間浮き続けられるための浮力を国が定めたもので、7.5kg で体重 80kg の人間が浮くように設定されている。

一般に水中での必要浮力は陸上体重の 1/10 といわれている。したがって 2ℓ の空ペットボトルには体重 20kg の人間を浮かせる浮力があることになる。

幼稚園児体重 20kg の場合、400ml の空ペットボトル 5本で十分な浮力を確保できる。また、小学生体重 40kg の場合では、2ℓ のものを 2本以上用意すれば浮力を確保できることになる。

津波による死因の大半は溺死と言われている。しかしながら、溺者を助けようにも 2次災害を恐れ、救助できずに無力の見学者も。ペットボトルはゴミの王様ではなく、皆で知恵を出し合い活用方法を考え、水難事故の救助王になってほしいと切に思うは私だけかな・・・

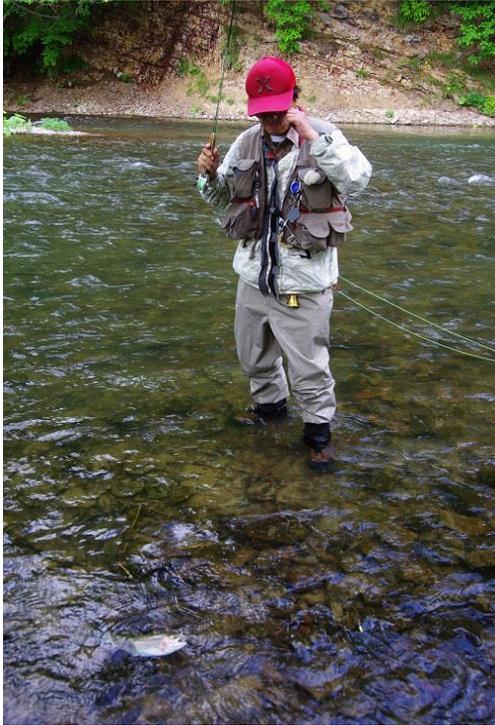
2015年のフライ釣行記

新井 勝之

Part 1 : 5月30～31日と道東の河川でニジマス釣りと阿寒湖のアメマス釣りに行きました。

初日はニジマスの大形はいませんが、比較的濃い川で釣り始めました。水量はやや多いものの、釣りには影響は無いものでした。川辺に下りるとポイントではライズが有り、逸る気持ちを何とか抑えながらフライをセットアップし、ポイントに流すと一投目からヒットし、体長 25cm 位のニジマスを釣り、その後も

同じポイントで5匹を追加し、渋く成ったので 別のポイントに流すと



いきなりフライをひったくる様に銜えて 1メートル近くまでジャンプし、思いのほかハラハラさせて楽しませてくれて、引き寄せると34cmほどのニジマス。関東辺りの養殖ニジマスとは比べ物にならない引き味です。とにかく魚影が濃く、ニジ以外にヤマメ、イワナ、ハヤも釣れ、夕まずめには、流木が横たわる淵で40cmのニジマスが釣れ、入渓地点から100m位の間を12時頃から釣り始め、6時頃まで楽しませてもらいました。

翌日は阿寒湖で早朝（4時頃）からの立ちこみ釣りで、ワカサギパターンフライで狙いましたが、なかなかヒットしなく、5時を回った頃ようやくヒットし、45cm程のアメマス釣り上げました。その後、当たりは無く、時間だけが過ぎ、天候も急変し強風、雨、雷と春の嵐に合い、納竿しました。

Part 2 : 11月7～8日、アメマスを求め道東へ行きました。

ここ3年ほど前から、恐らく環境の変化等により、アメマスの数が激減し、私達の釣行も何時最後にするか？を思わせるほどの状況に追い込まれてしまいました。

不安な状況での釣行ですが、現地の友人が前日に偵察をしてくれていたもので、一番良さそうな場所に入渓し、魚が就いているか、確認しながらポイントを探すとライズしているのを見つけ、基本はウェットのメーカーでの流し釣りですが、ドライフライをセットし流すとヒットし、アメマスとしては小ぶりの35cm位のを連続で5匹をヒットして、楽しませてくれました。

安堵したので、ウェットで大形を狙い50cm程のものを釣り、その後は場所を移動し、4時半頃まで釣り、10匹ほど釣り、まずまずの初日でした。



翌日は、昨夜から雨が降り、前日の川では状況が悪いので 別の川へ行く事になりました、そこは小河川ですが、比較的にアメマスが就くポイントが 限られますが その分濃いです。入渓して、ポイントにフライを流すとアタリが有り、いきなり60cm越えがかかり、ロッドを大きく曲げて楽しませてくれました。その後、場所を変えて釣果を8匹ほどにしましたが、雨が強まり、足場がぬかるみ危険になったので、後ろ髪をひかれる思いで納竿しました。

釣りインストラクターになって

門脇 勇

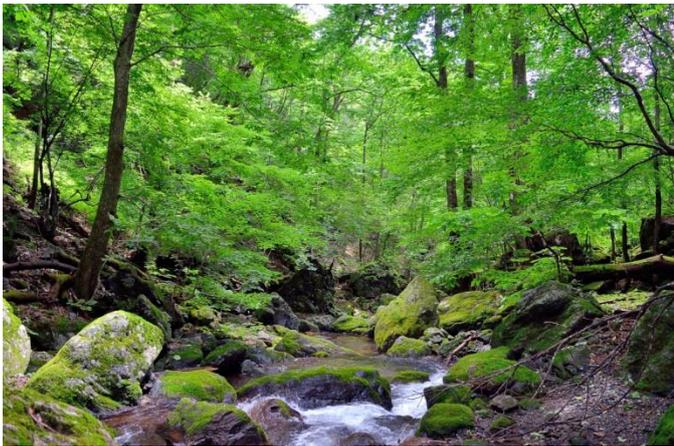
昨年釣りインストラクターとなり、遊漁規則だけではなく、楽しい釣りのための安全面についても勉強させて頂き、まだまだ学ぶべき事がたくさんありますが、僅かながら実践させて頂いた年でした。

釣り人の減少がある中であって、意外と同世代や、それ以下の世代に内水面、海面に限らず釣りをしたいと言う人が多く、時間が合えばご紹介させて頂く機会もありました。その中で、入門者の多くは、釣

り具、釣技は元より、遊漁規則や安全に関わる用具、技術について自然を軽視している事が多いようです。



多摩川水系A沢



多摩川水系B沢

さらには、自然あつての魚と釣りであること意識を持っていないことも多いようです。私の釣のメインフィールドである、源流域と言う生態系の凝縮されたような場所にお連れして、釣りを通して自然を楽しんでもらうことで、自然保護の意識も持つて頂くことができたのではないかと思います。

山肌から染み出す一滴が海へと注ぐ中で、たくさんの綺麗な魚が生息し、たくさんの釣りが愉しまれている中で、釣り人だけでなく水辺に求める人工物の無い、生き物の棲みやすい自然を護るためにも、少しずつでも多くを知り、実践できればと思っています。



多摩川水系B沢のネイティブ・ヤマメ

アラスカ釣行記

木村 陽輔

ラストフロンティア

アメリカの人々は、憧れと敬意の念を込め、アラスカを「ラストフロンティア」と呼んでいる。面積は日本の4倍で米国第1位の広さを誇る洲である。アンカレッジ空港の周辺は永久凍土のため、大きな木はなく、細く背の低いアラスカ杉が所々に生えている程度だ。そこに棲息する川のシルバーサーモンに挑む！シルバーが走り、ロッドがきしむ！リールが唸り、サーモンがジャンプする。エキサイティングなサーモンとのファイトは、釣り人を至福の境地へと引き込んでいくのである。



今回釣行する川は、アラスカにおいては短い方の川で雨が多いため流れが安定したうえ、多くのアラ

スカに流れる川のような氷河に削られた濁った乳白色ではない。そのため、釣り人には魚影が見えるのでファイト中の魚の動きが目に見え、ロッドから伝わってくるサーモンの重量感がたまらないところである。

今日はその憧れのシルバーサーモンを狙いに行く。私にとってはまだ見ぬ川、まだ見ぬサーモン、様々な思いを巡らせ、心躍らせてバンに乗り込んだ。車は左に港を見ながら旧ロシア領時代の面影を残す町並みを走ってゆく。小さな港町だが、どこか引かれる不思議な懐かしさがあふれている。

海岸線は陸深く入り込み、小さな岬の岩場にはウニが何段も積み重なって生きているという。誰もとらないのでたくさん棲息しているのだろう。車は海岸線から山道を上り下りしてもうもうと土煙を上げながら砂利道を走った。それほどスピードは出してないのだろうが、でこぼこ道にハンドルが取られそうになったり、あまりの土煙のものすごさに、あたかも猛スピードで突っ走っているかのごとくに思われた。

シルバーサーモン・フィッシング



やっとの思いで目的の川に到着した。川はゆるやかに流れ、いたる所が好ポイントのように見える。

初めてでなにも知らない私はサーモンのたまる流れの深み分からなかった。川を、目を凝らしてみると深みがダークグリーンになって魚が集まっている。ここにいたかとキャストイング、ゆっくりリトリブして目の前をフライを流すが口を使わない。

キャストイングの下手さかげんに目の前でサーモンがジャンプして私をちゃかしているようだ、午前中は魚に遊ばれて全くだめだった。ガイドが夕方

は潮が満ちてくると同時にサーモンが海から遡ってくるからチャンスだという、遠く下流のほうでジャンプしているサーモンの群れがこちらに近づいてくるのが見える。

いよいよチャンス到来！ガイドの言うとおりのポイントへキャストイング。よし、うまくいった。期待に胸を膨らませ、息を殺してじっと待つ……。「フィッシュオン」「キューーン」、エキサイティングなリールの鳴る音は隣の釣り人だった。

ねたましさの思いを引きずり自分のラインをリールに納める。「次は俺だ！」と決意新たにロッドを握る。神経はラインの先端に体の一部となって集中する。アラスカ特有の荒涼たる山に囲まれ、その山間に広がる小さな平野を流れる川原に立つ自分の姿が、その大自然に溶け込みシルバーサーモンに魅了された一人の釣り人が太陽の光にシルエットとなって立っている。静かなそして至福の時間が過ぎて行く。やがて私の心は川の中に……。

精悍な顔のサーモンがはっきりと見えた。「来たー！」「キューーンッ！」「フィッシュ・オンッ！」一気に下流へ突っ走るシルバーサーモンは、ロッドを立てリールを押さえても一向に止らない。「止れーっ！」「止ってくれー！」まさに祈る心境。やむなく自分が移動して距離を詰めるしかない。下流に走りながらもリールが鳴り、ロッドがきしむ。細いラインは今にも切れそうだ。張り詰めたラインを振り切ろうとシルバーサーモンがジャンプする。



銀色の魚体が陽に映えて光る。夢のような光景を何度か繰り返して、ついにシルバーサーモンは私の腕に抱かれた。その銀色に輝く体と目を見つめて「ありがとうシルバーサーモン」釣り上げた喜びよりも、感動を与えてくれたシルバーサーモンに会えたことが嬉しかった。

黒部源流 薬師沢釣行

吉岡 宏治

2015年夏、黒部源流 薬師沢まで行ってきました。

2年前に、毎年行っている釣りの先輩Kさんから話を聞いて行ってみたいとは思ったものの、その頃の私にはとてもそこまでたどり着ける脚力がなく、いつかはと思っていた。

それから2年、釣りで山の奥のほうに入ったり、登山をしたりして、なんとか行けるのではないかと自信もついたので同行させていただくことになった。

日程

8/13 前泊のため富山に移動

8/14 登山

8/15 釣りの日

8/16 下山して帰宅

当日は朝早く出発するため富山に前泊。北陸新幹線に初めて乗る。地元のうまいものをたくさんいただき就寝。

翌日、登山の日。4時起床。なんとどしゃ降り。

登山口の折立までタクシーで移動し、雨具を着て登り始める。前に行くKさんが私の様子を見ながらスローペースで先導してくれて、どうにかその後をついていく。



登り始めてから4時間45分。その日一番標高の高い場所にある太郎平小屋に到着。今回の目的の1つだった、行者ニンニク入りの太郎らーめんがとてもうまかった。

ひと息ついて再出発。あとは基本的には下りなのでなんとかかなりそうだったのだが、その後の下りがこれまたかなりのキツさ。傾斜的には登りよりも急なんじゃないだろうか。

必死に下りきってしばらく歩くとだんだんと川の音が近づいてきてわくわくする。2つの沢の出会いに橋がかかっている場所に出たところで竿を出すことに。

釣り方は「てんから」である。するとKさんが橋のすぐたもとにある直径1mぐらいのたまりからあっという間にいい型のイワナを釣り上げる。それを見た私も俄然やる気を出し、上流に向かったKさんとは逆に下流側を釣っていく。

すると私にも数投で反応があった。

「パシヤパシヤ！」



バレないように慎重に取り込み、どうにかこの旅で記念すべき1尾目を釣り上げることができた。

とても可愛いイワナだ。しばらく眺めた後、そっとリリース。その後も毛バリへの反応は良かったが、出方が速くて合わせきれなかった。

30分ぐらい釣ってふたたび歩き始める。この頃から足が悲鳴をあげはじめ、息も絶え絶えなんとか宿となる薬師沢小屋に到着した。荷物をかたした後、飲んだビールが最高にうまかった。

翌日は1日釣りの日。他に泊まっていたフライマンの方々が上流に向かうということで、私達は本流沿いを下流側に向かい、40分ぐらい下ったところから釣り始める。昨日とはうってかわって空は雲一つない見事な快晴でとても気持ちがいい。



なかなか寄ってこず、しばらくラインを張ったままキープ。徐々に引き寄せ、ようやくその日の1尾目を手にすることができてほっと一安心。すでに釣り始めてから3時間が経っていた。

そこからは怒涛のラッシュ！ といきたかったが、その後なんとか2尾を追加したところで私の釣りは終了～～。コンスタントに釣り上げるKさんとは裏腹に、なかなか厳しい釣りとなり、初めて行った川での対応力が今後の課題となった。

翌日最終日は下山の日。私の足を考えて、午前2時に起き、準備を整えて出発。下山といっても太郎平まではめげそうになる登り。

歩き初めは意外に足取りは軽かったが、傾斜がキツくなってくるとあっという間に心拍数急上昇。ゼゼゼ言いながらとにかくゆっくりでも1歩ずつ足を出していく。

ここでもKさんがあっという間にいい型のイワナを釣り上げていた。もちろん私もやる気だけはあるのだがなかなかとらえられない。



川幅がだいぶ広がってきたところで思い切って渡渉して対岸へ。少々アセリはじめた頃、ようやく竿がしなる。こいつは逃せない。



5時15分、なんとか太郎平小屋に到着。その後、標高差1000mをヒイヒイ言いながら下り、8時40分に登山口に到着。なんとか無事におりてくることができた。

そこからはバスー富山地方鉄道ー北陸新幹線を乗り継ぎ東京に帰ってきた。

数は少ないながらも黒部源流イワナに出会うことができ、ひとりではとてもなしえなかった大冒険、Kさんに感謝するとともに、ぜひまた行きたいと思う旅となりました。



キッズテンカラ教室を開催して

吉田 孝

子供たちにもテンカラを

テンカラ教室が月に1度、毛バリの教室も月に1度。奥多摩の管理釣り場を利用して、私が講師を続けているテンカラ関連の教室も6年目に突入した。これまで数多くの生徒さんたちに、テンカラに関する多くのことを解説してきたが、そのほとんどは「大人」であった。

私がこの教室を開催している一番の理由には、大きな魚を釣ることや数釣りをするだけだけが釣りの目的ではなく、釣りを通じて私たちが楽しませてもらっている自然環境を守ろうという気持ちを持ってもらいたいということがあったからである。

そこで私の教室では、釣りの技法を教えるだけではなく、マナーや法的なことと同時に環境問題のことも話すようにしている。このようにして、「大人」に対しては多少なりともその意向を伝えることができていると思うのだが、これらのことを次世代の人たちにどうやって伝えていくかという、新たな問題を考え始めていた。

若い人、といっても中学生にでもなれば、大人と同じ対応で話を進めることができるため特に問題は無い。ただ、それより年齢の低い子供たちにこれらの事柄をどのように伝えていけばよいのかということを考えていた。

そこでそんな考えを実際の企画にしてみようと、2015年の夏、子供たちの夏休みを利用して「キッズテンカラ教室」を開催することにした。

楽しさを伝えるには

その計画の内容は、相手は小学校の低学年とし、「自分ひとりで出来たんだ」という独立心を持ってもらいたいこともあり、親と一緒に教室ではなく子供たちだけとした。そして今回の教室では、まずは釣りの楽しさを少しでも良いので感じてもらうことに重点をおいた。

初心者向けの釣りの教室で最も大切なことは、「1尾でかまわない。自分の手で魚を釣る」ということに尽きると思っている。これは私の講師としての経験から出た答えだが、いくら丁寧に説明をし、いくら楽しいということを伝えてみても、実際に魚をハりに掛け、魚とのやりとりを感じてみないことには楽しさは伝わらず、なかなかその後釣りを続けて

みようという気持ちになる人が少ないからなのである。

まして今回の参加者は小さな子供たちだ。事故や怪我をさせないよう、安全に開催することはもとより、飽きることがないような形をとりたかったため、以下のような計画を立てたのである。

計画と実施

釣りの準備から釣り上げた魚を自分で処理する一連の事柄を体感してもらうため、

●毛バリをひとりひとりに巻いてもらう「タイピング教室」

●その毛バリを実際に使い、魚を釣ってもらう「実釣教室」

●釣った魚を自分の手で処理し、焼いて食べるという「料理教室」

といった形とし、各カテゴリーを1時間という短い時間に設定し、目先を変えることによって子供たちの興味をそらさないような形をとった。

ただしこの形では、とても私ひとりが大勢の子供たちを指導して済むというものではないため、安全面も考慮し、子供たちひとりひとりに担当の講師を付けるというマンツーマン方式を採用した。

その講師には私の主宰する「吉田毛鉤会」のメンバーの協力を得ることにした。

当日、開催前のご挨拶をした後、事前に情報をいただいていた参加者のことを考え、それぞれ適任と思われる講師を割り振り、まずはタイピング教室（毛バリ巻き）からスタートした。

タイピング会場では、それぞれの生徒さんにそれぞれの講師たちが、つきっきりで手ほどきをしてくれたので、生徒さんの希望する思い思いの材料を使って、参加者全員時間内に2～3本の毛バリを巻くことができた。

親御さんたちも、自分のお子さんの様子を真剣に見つめていたが、みなさんの熱気でカメラのレンズも曇る勢いであった。

タイピングが終わると、自分で作った毛バリをこちらで用意しておいた毛バリケースに入れてから会場を移動し、講師のみなさんにお手伝いしてもらいながら仕掛けのセットをする。

「自分で作った毛バリで本当に魚が釣れるのだろうか」という、子供たちの不安と期待の入り混じ

った表情は愛おしくもあり、こちらの指導にも必然的に熱が入っていく。

ただ、今回参加した小学校の低学年という年齢では、初めて釣りをする場所が、奥多摩の流れの強いストリームエリアでは、結果を出すどころか危険でもあるため、釣り場に事情を説明し、この日のために特別に釣り場のポンドを利用させてもらえるように許可をしてもらった。

おかげで子供たちは、キャストイングから魚を釣って取り込むところまでを、全員無事に楽しむことができた。

その後は魚の処理方法を見せ、これも全員に経験してもらうことに。子供用の軍手を着用させ、包丁の代わりにカッターナイフを持たせ、手を添えて魚の処理を体験してもらった。

このことによって、日常生活ではほとんどの場合「食材」という形でしか見ることのないものを、今まで生きていた魚を私たちが口にするまでのことを、子供たちの目や身体を使って感じてもらい、生き物の「命」をいただくことのありがたさや大変さを、少しでも理解してもらうことが出来たのではないかなと思っています。

親御さんたちも喜んで

「一緒に来られたお父さんやお母さんの分の魚も釣ってくださいね～」と、実釣の時間の前に子供たちに伝えたこともあり、みんな真剣に釣っていた。真剣だったのは子供たちだけでなく、担当の講師たちも、なんとか釣らせなければという責任感から頑張って指導していた。

こうして家族の分の魚も釣った子供たちは、その場で炭火を使って焼いた魚をお父さんやお母さんにも食べさせることが出来たせいか、みんな鼻高々で、親御さんにとっても大変嬉しい教室となったのである。

最後に

今回の教室では、子供たちに命の大切さとその命を育む環境の大切さを、釣りという趣味を楽しみながら、多少なりとも感じていただくことが出来たのではないかなと思っています。

そして「他人に指導すること」。このことは、企画の段階から準備に至るまで本当に大変なことではあるが、参加者の喜ぶ顔を見たり、感謝の言葉を

頂戴したりするとその苦労も報われるということ、あらためて心から感じる事ができた。

また、今回悪かった点を反省し、次は更に良くなるよう考え、こうして教室やイベントをやる毎に蓄積されていくノウハウを、今後のインストラクターとしての活動に生かしていきたいと思っている。

水産多面的機能発揮対策事業

鈴木 伸一

本年度は渡良瀬漁業協同組合を中心に、佐野市柿平町、水木町、秋山町の小学生や地域住民の方々の協力を得て、JOFI 東京、WFFJ (World Fly Fishing of Japan)、生成昆虫談話会とのコラボによる秋山地区ゆたかな川づくり協議会を立ち上げ、流域の自然保全を目的とした水産多面的機能発揮対策事業に取り組んだ。

僕が子供のころは、東京都内であっても其処処に釣り場は存在しており、春になれば溪流のヤマメ釣り、GWのころになれば清流のオイカワやウグイ釣り、暑い盛りはアユ、秋ともなれば河口のハゼ釣り、冬には自転車に乗って近所のホソ（田圃の水路）でのタナゴや小鮒釣り、四季折々の釣りがそう遠くへ行かずとも楽しめたものである。

ところが現状を見るに東京に住んでいると釣り場は遠ざかる一方で、ワイルド（野生）な魚を求め海外に足を伸ばす方も多くいらっしゃるようになってきた。そんな思いから兼々僕は内水面の釣り場は最早釣り人や地域の漁協の方々がその環境保全に取り組まないことにはいずれ釣り場は消失してしまうのではないかと危惧していた。

今回、たまたま僕の思いと、豊かな自然を残したいという渡良瀬漁協や地域の方々との思いが一致し、秋山川における自然保全の試みが実現できた次第である。

我々釣り人や水生昆虫の専門家の主な役目は、水生昆虫のモニタリング方法、そのデータを分析することにより、いずれは専門家がいなくても地域の方々のみで秋山川流域の自然環境の変化を量的に判断でき、その対策が打てるように指導させていただくことにある。

そのために今年度は、年に4度のモニタリング調査、採集した生成昆虫（昆虫以外の底生動物も含む）の属レベルの同定・標本作成実習、親子水生昆虫観察会、モニタリング調査データに基づく環境変化を数値化するための方法の検討などを実施してきた（参加者の

論文発表にも関わるため詳細については控えさせていただきます。

以下に①モニタリング調査、②水生昆虫の同定・標本作成実習、③魚類・底生生物を利用した生物群集の容易な多様性評価方法についての講義、④親子水生昆虫観察会の様子を写真で紹介する。

モニタリング調査

底生動物の専門家による水生昆虫の採集方法、現場での分類方法の指導の様子



生物群集の容易な多様性評価方法についての講義



水生昆虫の同定・標本作成実習

実体顕微鏡を用いて種レベル、肉眼やルーペを用いての属レベルまでの同定、標本の作製、ラベルの記入方法などの実習風景



親子水生昆虫観察会



続2 釣り場の魚たち

四条 徳明

低学年のブドウ狩り----- タチウオ

町内会の高齢者健康保持事業の一つ、山梨県石沢温泉とブドウ狩りに参加した。ボランティア含め16人の小型バスで、観光農園でブドウ狩りした後温泉でゆっくり休んで帰るという日帰り旅行で、園内は食べ放題で、帰りには配られた籠に摘み取ったブドウを持って帰れるという型通りのコース。

我々グループがブドウを摘んで長ベンチに座って食べていると、空いていた園内にワイワイ声が出て、小学校2・3年と思われる団体、100人くらいが入ってきた。ブドウを食べながら子どもたちのブドウ狩りを眺めていると、私は東京湾口のタチウオ釣りとは重ね合わせると面白いことをみつけた。

棚の高さは子どもが背伸びしてやっと低いところの房に届くくらいなので、低い房はたちまち摘まれて、その上の房を狙うには跳びあがらねばならない。跳びあがり、房の枝部分を掴まれば枝が撓んで房全体を摘み取れるが、房までしか届かなかった子は房の半分の粒が手に残っているだけで房は半分になってしまう。当然、そんな房を狙う子はいない。

晩秋から冬の湾口釣タチウオは私の好きな釣りの一つで先週も行ったが、隣の船の話し声が聞こえるほどの大集団になっているポイントで、船頭指示棚の上下をシャクルと海面から80m（底から12m）あたりで竿先に当たりが出、それから釣掛けするのが大変。上手な人は入れ掛けしても、私は即合わせる、ゆっくり誘い上げる、竿先を少し送り込む、じっとそのまま待つ・・・色々試したり、人の真似しても、釣フツコロ直前まで喰って離してしまう。もう一口喰って欲すれば釣掛かりするのに！！。掛ける確率で20%がいいところ。

今、ピョンピョン跳ねている子どもたちは、私の釣りに喰ってくるタチウオではないか。餌を半分齧って釣掛かりしない。もし子ども達に沢山摘ませるには棚を50cm下げればよい。ならば私のシャクリ止めを50cm下げて待てばいいのかな。

たまに100cmを超える大物は、付き添いの先生だろう。先生は自分が摘むより子どもたちの世話で動き回っているので狙って釣ることはできないだろう。など思いを巡らせているうちに土産のブドウを十分摘み取る時間が無くなってしまった。

ハナダイは年長組の外出

正月用に赤い魚を釣っておきたいが、マダイは難しくハナダイならマダイに似ているし数が出そうだ。関東でハナダイ釣りを出しているのは、久里浜、片貝、飯岡と外川で1、2隻づつ出ている。外川はコマセを使わぬエビハナダイで他はアミコマセだが、外川は数を出ても掌サイズが多いので片貝に行くことにした。

休日なのに4人しか客がないのでお祭りすることもなく、結果は30cm以上が18尾、以下が6尾で期待した以上の釣果が上がった。

更に船釣り60年以上で初めて経験したのが、カモメを釣ったことである。相模湾でも外房でもカモメは船釣りのお友達で、サバの腸とか小さな外道とかを投げてやると争って喰いにくるが、タチウオの餌・サバ短冊のような大きな餌でも、テグスの付いた餌には決して喰いつかない。それがコマセ入替でビンが沈みはじめた時に下釣のオキアミLに喰いついてしまった。

ハリス2号で3mなのでバタバタしてもすぐ手繰り寄せられたが、意外にハリス切れせず船べりに抱き寄せ抱えることが出来た。釣は嘴の付け根にしっかりと掛かっていたが、抱きかかえてみるとカモメはこんなに軽いものかと驚くほどの目方で、大アジ1尾程度もあつたらうか。

帰りコースは船頭とカモメの話からハナダイの話をしながらの40分。以下は船頭の話の要約です。

カモメは海面30m下の魚の様子を知っていて、カモメの動きを見ていると群れがどちらの方向へ動いているか分かるそうです。片貝のハナダイは保育園年長組が外出するときの2・30人の子どもたちと同じくらいの広がり度で1群れを作り、群れの頭に大きいのが、中ほどに小さいのが、後ろの方は大小交じりで、全体はコマセの流れについて移動していく。

ポイント入替直後は指示棚に合わせれば大きいの中から喰ってくる。2投目以降は群れの中心付近なので多少棚が違って入れ喰いになるが、やがて群れから外れそうになるとスローで船を前後し群れに合わせる。当たりが遠のいたらポイント移動のくりかえしをする。

喰わないとコマセを沢山撒くのはハナダイの動きに反するので、喰わなくなったらコマセを少しにした方がいい。など。次回行くときはこれを参考に竿頭になってやろう。

お宝コーナー

1950年代のOrvisのカタログを見ていると、Lee Wulffは鮭竿の穂先や6'6"の鱒竿でもアトランティック・サーモン釣りを楽しんでおられていたようだ。他にもそんな竿を使わなくてもいいのではと思うような超ショート・ロッドを嗜む方は結構いらっしゃるようである。インターネットが発達したおかげで世界中の釣り情報が瞬時に得られるようになると、極めてマイナーな釣りに関してもそれなりに愛好家がおられ、それなりに楽しんでおられる様子が手に取るように分かってくるものである。

決して妙な拘りからだけではなく、ロッドは短くなるに従って、キャストにしろ、ピックアップ、プレゼンテーション、フッキングにいたるまで、基本と言うかそれらの物理的な仕組みが分からないことにはなかなか実釣にはつながらないものである。言ってみれば、その小さな道具にはフライ・フィッシングのすべてが凝縮されているような気がしてならない。

A & F Banty (Hardy 製)



長さ4フィート4インチ。竿の重量が1オンスであることがBantyの要件であるようだ。

1960年代の前半に、かのCharles Ritzとも親交の深かった、Esquire誌の創設者の一人であつて、かつ編集者でもあつたArnold Gingrichと彼の仲間が4フィート4インチのショート・ロッドの釣りを提唱したところ、それに呼応してHardyはPhantom Hollokona 4'4"を、OrvisとJim Payneは"Banty"と名付けた4'4"ロッドをそれぞれAbercrombie & Fitchを介して販売するようになったのが、"Banty"の始まりであつたようである。

A & F Passport



長さは5フィートと少し長いですが、当時のパスポート・サイズであろうか？ 僅か16.6×8.7×2.5cmの小箱に納まってしまふ。言ってみればA & F Bantyのマルチピース（ハンドル込みで10本継）版。

Penfishing Rod



このシリーズには4フィート6インチ、5フィート1インチのものがあるが、この竿は後者。

スピニング・リールやベイト・リールとの組み合わせもOKで、それらとの組み合わせではかなりの大物も釣り上げられており、結構ファンも多いようだ。

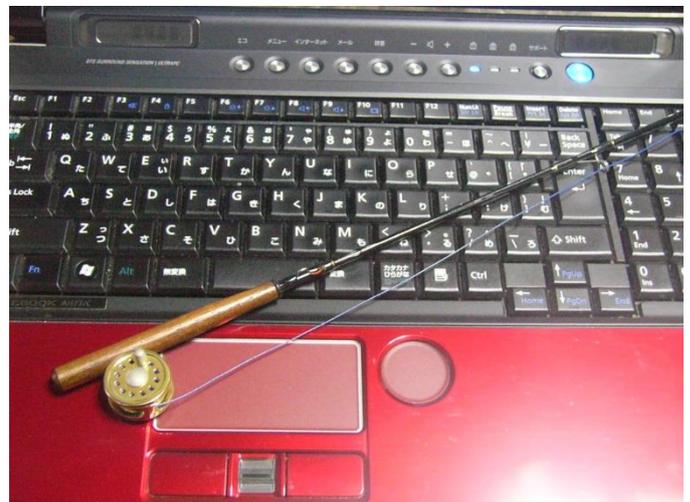
残念ながらフライ・フィッシングでは適応リールのライン・キャパシティが小さく大場所での釣りには向いていないように思う。

Micro Fly rod



長さ僅か34インチ。この竿、及び Micro Fly Reel との組み合わせ（J. Austin Forbes Lt. the Micro Fly Fishing Rod Set）がマス相手には最小のフライ・フィッシング・システムではないだろうか？ それとて、フライ・リールのライン・キャパシティが非常に小さいため大場所ではお手上げである。

ミニチュア・ロッド



この竿は長さが69cm。決して実的に作られたものではなく単なる玩具と言ったところであろう。もちろんリールにはチェック・システムは搭載されてはおらず、フライ・ラインのような太い糸は巻けない。

それでも僕は代用のラインを捜し、クチボソやタナゴ、ブルーギルなどの小魚相手に楽しんでいる。

2015年度活動実績

日付	活動実績
01/30～02/01 (金・土・日)	2015 国際フィッシングショウへの参加 ニジマス釣り等のサポート
01/31 (土)	釣りインストラクター・マスター研修会への参加
02/07～02/08 (土、日)	フィッシングマスター資格試験 JOFI 東京から2名受講
03/01 (日)	男の料理教室(鮫鱈料理)
03/15 (日)	平成27年度定期総会
04/19 (日)	春季懇親釣り会
05/17 (日)	親子マス釣り懇親会 マス釣り & BBQ
07/25 (土)	日釣振東京都支部主催 第11回若洲海浜公園親子釣り教室への参加 釣り指導サポート
08/23 (日)	第3回アウトドアフィッシングスクール in 若洲への参加 釣り指導・魚の捌き方サポート
08/23 (日)	全磯連関東支部主催女性・少年少女釣り大会への参加 釣り指導サポート
09/06 (日)	秋季懇親釣り会
09/13 (日)	隅田川へ子供たちが稚魚放流への参加 稚魚放流サポート
10/03 (土)	ふるさと清掃運動会実行委員会主催ちょっといいこと「多摩川でゴミ拾い」協力参加、及び模擬ルアー・キャスティング教室
10/04 (土)	日釣振東京都支部主催 第1回「初心者・ファミリー釣り教室」への参加 釣り指導サポート

10/18 (日)	「水辺感謝の日」清掃デーへの参加
11/01 (日)	みんなで遊ぼうフィッシング祭りへの参加 釣り指導サポート
11/28～11/29 (土・日)	26年度全釣り協公認釣りインストラクター資格講習・試験 スタッフ・講師を派遣
06/21 (日) 08/30 (日) 10/10 (土)	渡良瀬川支流秋山川において 水産多面的機能対策発揮活動

編集後記

今回は釣りインストラクターとして考えさせられる安全面に関する話題、釣り場環境に関する話題、自然の大切さ、子供をターゲットとした釣り教育を如何にすべきかなど安全、かつルール(やマナー)に則った釣り振興に役立つ様々な話題、アラスカや北海道、黒部源流など貴重な釣り情報が提供されました。今後の勉強会にも是非反映させていきたいと思っております。

本会報誌は皆様からの寄稿の様子を見て適宜特集を組んで発行していきたいと思っております。原稿は随時募集しておりますので、会員名簿を参照し広報部宛にEメール、又は郵送でお寄せください。勿論、集まり具合によっては期限を切って募集することもありますので、その際はどうぞよろしくお願いたします。(N. S.)

東京都釣りインストラクター連絡機構会報誌
第4号

発行日 平成28年1月15日
発行 JOFI 東京
(一社) 全日本釣り団体協議会 公認
東京都釣りインストラクター連絡機構

編集 同上(広報部)

URL <http://www.jofi-tokyo.org/>